卒業論文

多胎家庭の母親の孤立の実態について

令和 3 年 1 月 19 日提出

学籍番号　1712544B

氏　　名　榊　真緒

指導教員　内田　浩史

要旨

本論文の目的は、多胎家庭の母親が孤立する実態を明らかにすることである。多胎家庭の母親の孤立について、その実態は把握しにくい現状がある。なぜなら多胎育児の悩みに関する調査のデータは、定性的なデータがほとんどであり、客観的な判断ができず、孤立の実態を把握することは困難である。

この現状を踏まえて、多胎家庭の孤立の実態を明らかにするためには、客観的に孤立を測定する必要がある。そこで本研究では、母親の語りなど、定性的なデータをもとに、孤立を測る指標を作る。その指標を用いた統計を取ることで、多胎家庭の孤立の実態を定量的なデータで示し、多胎家庭の孤立の実態を明らかにすることを試みる。

＜キーワード＞
多胎家庭　孤立　社会的排除　心理測定尺度

目次

第 1 節　はじめに **1**

第 2 節　仮説 **3**

2-1 社会的排除の理論 *3*

2-2 仮説 *4*

第 3 節 アンケート **6**

3-1 心理測定尺度 *6*

3-2 質問項目 *7*

3-3 アンケート対象・方法 *14*

3-4 回答方法 *15*

3-4-1 年齢区分 15

3-4-2 回答選択肢 16

第 4 節 分析結果・考察 17

4-1 記述統計..... 18

4-2 それぞれの質問項目..... 20

第 5 節　終わりに 33

参考文献・参考 URL 34

第 1 節　はじめに

本論文の目的は、多胎家庭の母親が孤立する実態を明らかにすることである。この研究を行う動機としては、多胎家庭の母親の孤立は社会的な課題であり、その課題を解決するためには、まずは実態の把握が必要だと考えたためである。

多胎家庭の母親の孤立は社会的な課題だと捉える根拠として、大木、彦（2017）よると、多胎家庭を単胎家庭と比較すると、産後うつ、育児困難、社会的孤立、児童虐待など、様々な健康課題を有していると言及されている。また、実際に多胎を育てる母親の負担は大きく、村上、中新、鈴井（2012）によると、虐待の発生率が単胎の 8～10 倍あることが報告されている。

筆者の個人的な動機としても、多胎の母親にインタビューを行った経験から、多胎家庭の母親の孤立が社会的な課題だと考えたためである。筆者は大学のゼミの活動の一環として、多胎家庭の支援活動を行う、NPO と共同のプロジェクト活動を行なっている。その活動を通して、多くの多胎の母親に話を聞く機会があった。インタビューを通して明らかになったのは、多くの多胎の母親は、外出困難による社会からの孤立感や、外出した際に感じる孤立感などの悩みを抱えているという現状であった。

多胎家庭の母親の孤立について、先ほど紹介した論文など、様々なところで言及はされているが、その実態は把握しにくい現状がある。なぜなら多胎育児の悩みに関する調査のデータは、インタビュー調査による母親の語りなど、定性的なデータがほとんどであるからである。その中には、多胎家庭の母親の孤立に影響を与えているものや、その要因などがたくさん含まれていると考えられるが、定性的なデータであるため、客観的な判断ができず、孤立の実態を把握することは困難である。

この現状を踏まえて、多胎家庭の孤立の実態を明らかにするためには、客観的に孤立を測定する必要がある。そこで本研究では、母親の語りなど、定性的なデータをもとに、孤立を測る指標を作る。その指標を用いた統計を取ることで、多胎家庭の孤立の実態を定量的なデータで示すことで、多胎家庭の孤立の実態を明らかにすることを試みる。

本論文で多胎児の母親が社会から孤立している状態を定義する上で参考にしたのは、社会的排除の理論である。社会的排除の理論とは、物質的、金銭的な欠如に限らず、居住、教育、保健、社会サービス、就労などの領域において個人が排除され、社会参加や社会での交流を阻まれ、少しずつ社会の周縁に追いやられていくことを指す。(内閣官房社会的包摂推進室社会的排除リスク調査チーム(2012）)

社会的排除を測るためには、指標が用いられるが、その指標を考える上で参考にしたのは、阿部(2002)の中で説明されている、「貧困・社会的排除調査（Poverty and Social Exclusion Survey 、以下 PSE 調査）」の指標である。この調査では社会的排除を 4 つの次元から定義している。その中の一つである「社会関係からの排除」に本論文では着目した。

社会関係からの排除の指標について、具体的には、『社会関係からの排除(a.社会的に必要とされる社交活動の欠落，b.友人または家族とのコミュニケーションの欠如，c.寝込んだ時，力仕事が必要な時などの身体的サポート，悩み事などがある時の心理的サポートなど 7 つのサポート項目のうち 4 つ以上の欠如，d.選挙など市民活動の欠如，e.社交活動への不参加(金銭的理由，交通手段へのアクセスの欠如，仕事/育児などの理由を含む)』（阿部(2002)）と説明されている。

この理論を多胎児の母親にあてはめると、母親の孤立とは 3 つの形の欠如に晒されている状態にあることだと考えられる。

第一は、身体的負担に対するサポートの欠如である。これは母親の肉体的な負担を軽減する、行政からのサービスや、家族からのサポートが十分ではないなど、物理的な孤立のことである。

第二は、友人、家族などの大人との社交活動（コミュニケーション）の欠如である。これは周囲の人との繋がりを感じられないことや、相手と満足のいくコミュニケーションが取れないなど、人間関係からの孤立のことである。

第三は心理的サポートの欠如である。これは、母親が抱える悩みや不安、ストレスなどを解消できず、抱え込んでしまうなど、精神的な孤立のことである。孤立状態にある多胎家庭の母親はこの 3 つに分類される悩みを抱えているのではないかと考えた。

この 3 つの分類をもとに 13 個の指標を設定した。13 の指標は日本多胎支援協会（2018）に記載されている、多胎の母親を対象にしたインタビュー調査の語りを参考にしている。13 個の指標から 13 の質問文を作り、アンケートを作成した。

アンケートでは 1 つの質問に対して、5 つの年齢区分を設けている。その年齢区分は ⅰ. 妊娠から出産、ⅱ.出産から 2、3 ヶ月、ⅲ. 動き出してから、ⅳ.話しだしてから、ⅴ.イヤイヤ期の 5 つである。回答者にはそれぞれの年齢区分において、【当てはまる】、【やや当てはまる】、【どちらでもない】、【あまり当てはまらない】、【当てはまらない】の選択肢から、自分に最も当てはまるものいずれか一つを回答してもらう。

作成したアンケートは、社会的に孤立状態にある多胎児の母親を支援するNPO法人つなげるの協力のもと、多胎家庭を対象にGoogleフォームを用いて実施した。その結果、368件の有効な回答を得ることができた。

回答の結果はエクセルデータにまとめ、基本統計量を分析し、質問ごとの回答を%の割合で示した図から多胎家庭の孤立に関して読み取れることをまとめた。

分析の結果から、どれだけの割合の母親が特定の悩みを抱えているのかなど、定性的なデータからは読み取ることができない、多胎家庭の孤立の実態を把握することができた。

また、年齢区分を設けたことによって、ある特定の悩みを抱えている母親の割合は、年齢区分に応じて変化していることがわかった。例えば、「母親が体力的な限界を感じている」という一つの悩みに対して、その悩みを抱えている母親の割合が、妊娠中と出産後では大きく変化しており、また、子どもの成長段階に応じて変化していくことがグラフから読み取ることができた。分析結果の詳細については、第4節で説明している。

本論文は5節から構成され、その構成は以下のとおりである。第2節では社会的排除の理論の説明と、そこから立てた仮説について記載している。第3節はアンケートの作成についてまとめており、質問項目の選定や、アンケート対象、アンケートの回答方法を記載している。第4節はアンケートから得られたデータの分析結果や、それに対する考察を記載している。データについて。アンケート方法や、アンケート結果の説明を行う。第5節は本論文のまとめと今後の改善点について述べている。

第2節　仮説

2-1 社会的排除の理論

多胎家庭の母親が社会から孤立している状態を客観的に測る上では、社会的排除の理論が参考になる。

多胎家庭の母親の孤立については、日本多胎支援協会（2018）の中でも次のように言及されている。『多胎の妊婦や母親は、妊娠中は安静指示・管理入院、出産後は外出困難感のために社会的に孤立しており』『社会的負担として 、地域社会からの孤立と経済的な大きさが挙げられる。多胎育児では過重な育児負担がかかり、外出困難となりやすい。密室育児による社会的な孤立傾向がある。』

このように、多胎家庭の母親は過重な育児負担から、社会から孤立しやすい傾向にある。その実態を把握するために、本研究では、社会的排除理論を用いて、現状の分析を行う。

初めに社会的排除の定義を明らかにする。内閣官房社会的包摂推進室社会的排除リスク調査チーム（2012）によると、社会的排除とは、物質的、金銭的な欠如に限らず、居住、教育、保健、社会サービス、就労などの領域において個人が排除され、社会参加や社会での交流を阻まれ、少しずつ社会の周縁に追いやられていくことを指す。社会的排除の状況に陥ることによって、最悪の場合、生きることそのものから排除される可能性もあると説明されている。このように社会的排除を受ける側面は物理的なもの、金銭的なものなど、様々あるが、本研究では主に社会的交流の側面に着目する。

多胎家庭の母親の社会的排除の実態を把握する指標を考える上で、阿部(2002)の中で説明されている、「貧困・社会的排除調査（Poverty and Social Exclusion Survey 、以下 PSE 調査）」を参考にする。阿部によると、PSE 調査とは 1999 年、イギリスの Office for National Statistics が行った調査である。この調査では社会的排除を 4 つの次元から定義している。その 4 つは、⑴所得、または資源の欠如、⑵労働市場からの排除、⑶サービスからの排除、⑷社会関係からの排除である。

この中から本論文で注目したいのは、⑷社会関係からの排除についてである。⑷を選んだ理由については、⑷の指標が多胎家庭の母親が孤立するという状態を測る上で、最も適していると考えたからである。⑷の指標については、後ほど詳しく説明する。

一方で、⑴⑵⑶の次元に着目しない理由を説明する。⑴⑵⑶の次元の指標を用いる場合、貧困の実態を把握することの側面が強くなる。本研究の目的は、多胎家庭の母親が孤立するという状態を測ることであり、多胎家庭の貧困の実態を把握することではない。そのため、⑴⑵⑶の次元の指標は、研究目的との関連性が低いと判断したため、本研究では着目しないことにする。

⑷社会関係からの排除の指標について、具体的には、『社会関係からの排除(a.社会的に必要とされる社交活動の欠落，b.友人または家族とのコミュニケーションの欠如，c.寝込んだ時，力仕事が必要な時などの身体的サポート，悩み事などがある時の心理的サポートなど 7 つのサポート項目のうち 4 つ以上の欠如，d.選挙など市民活動の欠如，e.社交活動への不参加(金銭的理由，交通手段へのアクセスの欠如，仕事/育児などの理由を含む)』（阿部(2002)）と説明されている。

2-2 仮説

仮説として本研究では、2-1 で説明した社会的排除の理論を参考に、多胎家庭の母親の孤立を、次の 3 つの次元から定義する。①：身体的負担に対するサポートの欠如、②：友人、家族などの大人とのコミュニケーションの欠如、③：心理的サポートの欠如の 3 つで

ある。①②③の３つは、PSE 調査の⑷社会関係からの排除の指標を参考に、多胎家庭の母親の孤立を測るために設定したものである。

「①身体的負担に対するサポートの欠如」とは、母親の肉体的な負担を軽減する、行政からのサービスや、家族からのサポートが十分ではないなど、物理的な孤立を意味する。これは、⑷の指標から『寝込んだ時，力仕事が必要な時などの身体的サポート』（阿部(2002)）を参考にしている。

「②友人、家族などの大人とのコミュニケーションの欠如」とは、周囲の人との繋がりを感じられないことや、相手と満足のいくコミュニケーションが取れないなど、人間関係からの孤立を意味する。これは、⑷の指標から『a.社会的に必要とされる社交活動の欠落，b.友人または家族とのコミュニケーションの欠如』（阿部、(2002)）を参考にしている。

「③心理的サポートの欠如」とは、母親が抱える悩みや不安、ストレスなどを解消できず、抱え込んでしまうなど、精神的な孤立を意味する。これは、⑷の指標から『悩み事などがある時の心理的サポート』（阿部、(2002)）を参考にしている。

この３つを元に、多胎家庭の母親の孤立を測る指標として作成したものが、表１にある 13 項目である。

表１．多胎家庭の社会的排除の指標

①身体的負担に対するサポートの欠如	
1	同居する家族（パートナー、両親など）からの育児への協力がない。
2	人手が足りないなど、困った時に頼れるサービスが整っていなかった。 (ファミリーサポートなど)
3	自分の身辺のこと（化粧、おしゃれ、趣味など）をすることができなかった。
4	寝不足など、体力的な限界を感じることがあった。
②友人、家族などの大人とのコミュニケーションの欠如の欠如	
5	周りからの疎外感を感じることがあった。
6	見知らぬ人から双子の育児に関して言われた言葉に嫌な思いをする、傷つくことがあった。
7	家族（同居していない）からかけられた言葉に嫌な思いをする、傷つくことがあった。
8	家族（同居している）からかけられた言葉に嫌な思いをする、傷つくことがあった。
9	同居する家族と十分なコミュニケーションが取れなかった。
③心理的サポートの欠如	

１０	自身の周りに多胎育児のことを相談できる人がいなかった。
１１	家族（パートナー、両親、親戚など）からの多胎育児への理解がなかった。
１２	育児での頑張りが報われない、「自分ができていない」と責めてしまうことがあった。
１３	精神的に追い詰められたように感じていた。

これら 13 の指標は、日本多胎支援協会（2018）に記載されている、多胎の母親を対象にしたインタビュー調査の語りを参考にしている。13 の項目の選定の詳細については、第 3 節で説明する。

本論文では、この 13 の項目について多胎家庭にアンケートをとることで、母親の孤立の実態を明らかにする。

第 3 節 アンケート

3-1 心理測定尺度

本研究では、多胎家庭の孤立を客観的に測定できる既存のデータがないため、独自でアンケートを作成し、データを集める。アンケートを作成する上で、2-2 で設定した多胎家庭の母親の孤立に関する 13 の指標を数値化するために、心理測定尺度のアプローチを利用する。

横内（2007）によると、心理測定尺度とは、態度や、行動、感情や気分、ストレスなど、目には見えない特定の心理現象を測定する方法の一つである。特定の心理現象についての、いくつかの質問に対する回答を得点化することで、ある個人や集団がその心理現象を有する度合いを把握することができる。心理現象は直接見ることはできないが、心理測定尺度を用いることで、心理現象の様々な比較が可能になる。

心理測定尺度には、特定の心理現象に応じて、質問項目が決められているものもある。本研究で測定する「多胎家庭の母親の孤立」についての、既存の質問項目はないため、2-2 仮説を元に、質問項目の作成から行う。

手順としては、多胎家庭に対するインタビューなどを通じて語られた、育児の悩みなどに関する言語データをもとに質問項目を作成する。質問に対する選択肢に、あらかじめ数値を設定しておくことで、得られた回答を数値化することができる。質問項目の作り方に関しては、3-2 で詳しく説明する。

3-2 質問項目

この節ではデータの収集のために実施したアンケートについて説明する。本研究では社会的孤立の程度を測定するため、心理測定尺度を用いたアンケート調査を実施した。

アンケートの質問項目を作成する上で参考にしたのは、厚生労働省平成 29 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業として行われた『多胎育児家庭の虐待リスクと家庭訪問型支援の効果等に関する調査研究』（日本多胎支援協会、2018）に記載されているものである。この研究はインタビューガイドを用いた面接調査の結果をまとめたものである。そこでは複数の多胎の母親を集め、あらかじめテーマを設定し、そのテーマに沿って自由に話してもらってる。そのうえで、母親の語りの内容を損なわないように要約し、多胎育児の困難の特徴を抽出し、類似している「語り」を質的に分類し記載されている。

これらの情報に基づいて、本稿ではまず多胎の母親の孤立に関する①身体的負担に対するサポートの欠如、②友人、家族などの大人とのコミュニケーションの欠如、③心理的サポートの欠如のいずれかに当てはまる記述（語り）を抽出した。次に、抽出した項目を整理し、計 13 項目に絞った。アンケートではこの 13 項目から、多胎育児の問題を、①身体的負担に対するサポートの欠如、②友人、家族などの大人とのコミュニケーション、③心理的サポートの欠如の 3 つを下位尺度とし、それぞれについて複数の項目で質問する多次元性尺度を用いる（多次元性尺度については宮本,宇井 2020 p.62 を参照）。

本稿で用いた具体的なアンケート項目は以下の表 2 に示されている。

表 2. アンケートの質問項目

①身体的負担に対するサポートの欠如		備考
質問 1	同居する家族（パートナー、両親など）からの育児への協力があった。	反転項目
質問 2	人手が足りないなど、困った時に頼れるサービスが整っていた。(ファミリーサポートなど)	反転項目
質問 3	自分の身辺のこと（化粧、おしゃれ、趣味など）をすることができなかった。	
質問 4	寝不足など、体力的な限界を感じることがあった。	
②友人、家族などの大人とのコミュニケーション		
質問 5	周りからの疎外感を感じることがあった。	
質問 6	見知らぬ人から双子の育児に関して言われた言葉に嫌な思いをする、傷つくことがあった。	

質問７	家族（同居していない）からかけられた言葉に嫌な思いをする、傷つくことがあった。	
質問８	家族（同居している）からかけられた言葉に嫌な思いをする、傷つくことがあった。	
質問９	同居する家族と十分なコミュニケーションが取れなかった。	
③心理的サポートの欠如		
質問１０	自身の周りに多胎育児のことを相談できる人はいた。	反転項目
質問１１	家族（パートナー、両親、親戚など）からの多胎育児への理解はあった。	反転項目
質問１２	育児での頑張りが報われない、「自分ができていない」と責めてしまうことがあった。	
質問１３	精神的に追い詰められたように感じていた。	

質問１、質問２、質問１０、質問１１は反転項目である。反転項目を設ける意図は２つあり、一つ目は回答の結果の誘導を防ぐためである。例えば、質問１の場合、「同居する家族（パートナー、両親など）からの育児への協力がなかった。」と否定系で聞くことによって、「協力がなかった」という回答結果に誘導されることを防ぐためである。
二つ目は回答者の混乱を防ぐためである。先ほどの質問１のように、「協力がなかった」ことの有無を問うよりも、「協力があった」ことの有無を問う質問の方が、質問文として、回答者が理解しやすいと判断した。また質問２、質問１０、質問１１も同様の理由で反転項目にしている。
13 のアンケート項目は、元となる以下の表３のような語りに基づいて作成した。これらの語りはいずれも日本多胎支援協会(2018)の 37 ページから 70 ページに記されているものである。

表 3. 質問の元となる語り

①身体的負担に対するサポートの欠如		
質問１	同居する家族（パートナー、両親など）からの育児への協力があった。（反転項目）	「夫が非協力的、協力してほしい時間に家にいない。深夜に帰宅、早朝出て行くので昼間ずっとひとりで育児・家事をやっている。」
		「夫自身が、俺は働いているからお前が、専業主婦なのだから子育てをやれという家庭も多い。」

		「夫自身が、俺を構ってほしいと、双子育児に見向きもしない。もちろん別々の部屋に寝る。」
		「夫の協力無し、睡眠不足、人間と喋れないストレスも重なりこの時期に協力してくれなかったことは忘れない。」
質問 2	人手が足りないなど、困った時に頼れるサービスが整っていた。(ファミリーサポートなど) （反転項目）	「申請とか、自分が動かなきゃいけない。そこまで「来てください」と（言われて）「行けない」。」
		「行けないのに、「連れて来てくれたら預かりますよ」って、「そんなひどい」って。」
		「自分が動いて自分でリフレッシュをする時間を作らないといけない。」
		「結局、自分が動かなきゃいけないんだ。」
		「「相談に乗りますよ」って保健師さんに電話で話もいっぱい聞いてもらった。でも、結局、聞いてもらうだけでは解決には至りませんでした。」
質問 3	自分の身辺のこと（化粧、おしゃれ、趣味など）をすることができなかった。	「双子の育児・家事により、外に出る時間もない、電話もできない、自分は心も身体もボロボロ、髪の毛もぐちゃぐちゃ、肌もボロボロ、虚しいほど身体はボロボロ、食べる暇も、トイレも行けない。」
質問 4	寝不足など、体力的な限界を感じることがあった。	「ボロボロの状態で家にいたので、自分に対して情けなかったし、誰かに助けを求めたいけど、家にも入れさせることができない。とにかく疲労困憊していて毎日が必死、どうしようもなく苦しかった。」
②友人、家族などの大人とのコミュニケーションの欠如		
質問 5	周りからの疎外感を感じることがあった。	「頑張って広場に外出した。双子の人見知りがあってすごく泣き対処しきれない。支援センタースタッフの無理解、「無理してここに来なくてもいいのでは？」、頑張って広場に外出したママは、誰かと話したい気持ちだった。スタッフの言葉に落胆し悲しい思いをした。」
		「辛い気持ちわかってくれる人に会いたい、この気持ちは双子のお母さんでしかわからない。」

		「双子用ベビーカーを押して、涼みがてらうろうろしたりとか、一人にならないように。一人なんだけど、うろうろしていたら誰かに会えるかも。」
		「双子の１人が人見知りで１時間泣きっぱなし、初めて外出したのに、そこで帰る。やっと外出してもモヤモヤ、孤独感が解消されない。」
質問６	見知らぬ人からふたごの育児に関して言われた言葉に嫌な思いをする、傷つくことがあった。	「「でも、年子よりましやん」って言われたときは、もう、ほんまに（頭にきた）。」
		「「一括でいいわよね。」みたいな。一括がすごい大変なんだけど。」
		「「みられないんだったら、連れてこないで」みたいに言われた。」
		「「お母さんが手をつないであげれば、それでいいじゃない」って。でも、双子プラス上の子で、（手が）足りないじゃない。」
		「女の子のふたごを育てている友達がいて、自分も男の子のふたごを妊娠したので伝えると「お気の毒」と言われて嫌な気持ちになった。」
		「周りから「自然にできたの？」「あえて双子にしたの？」とか聞かれる。」
		「治療してできたなら大変でも仕方ないよね、と言われた。単胎なら「自然？」とは聞かれないのに、双子だから聞かれる。」
質問７	家族（同居していない）からかけられた言葉に嫌な思いをする、傷つくことがあった。	「両親が遠方に住んでいるため、双子を産んでも助けられないからと双子を産むことに反対した。」
		「知識がないから、励ましのつもりで行った言葉で傷つく。義両親思ったことを言うが、その一言、一言に傷つく。」
		「夫の親戚から双子を非難する言葉を言われ、精神的に辛かった。」

質問 8	家族（同居している）からかけられた言葉に嫌な思いをする、傷つくことがあった。	「言葉に敏感になる。双子なのに似てないねと言われるとその一言ですら傷つく。似てないと私はダメなのかと。」
質問 9	同居する家族と十分なコミュニケーションが取れなかった。	「夫に話しかけても（返事が）返ってこない。」
		「夫は全然いなかったですね、協力してくれない。」
		「けっこう離婚している人、多いですね。」
		「「子供が 2 歳ぐらいのとき、家に帰るのが憂鬱だった」と夫が後年に述べた。」
		「ちょっと成長してきたから大丈夫だろうと、夫がほとんど家にいなかったんで夫に対してのイライラもものすごかった。」
③心理的サポートの欠如		
質問 10	自身の周りに多胎育児のことを相談できる人はいた。（反転項目）	「同じふたごの妊婦さんに会いたかった。」
		「ふたごの妊婦さんに会えなかった。」
		「妊娠中にふたごママの友達が欲しかった。「こう言われた」とか不安を話し合いたかった。」
		「双子のお母さんたちだって、情報も昔からすればかなり出てきているので、ネットで見るなど、情報を集められるけど、文字で見る情報と、直に双子のお母さんと話す安心感とは違う。」
質問 11	家族（パートナー、両親、親戚など）からの多胎育児への理解はあった。（反転項目）	「眠たいのに周りから余計なことを言われる。親も周りも多胎に対する理解がない。無責任に何気なく言った言葉が、傷つけるつもりではなくてもストレスになる。」
		「入院するという情報がないので自分だけだと思われ、家族から「うちの嫁は」となってしまう。」
質問 12	育児での頑張りが報われない、「自分ができていない」と責めてしまうことがあった。	「義父母が手伝ってくれるのはありがたいけど、自分だめ感がすごく、この時期すごく強かった。頑張れば自分でできる、助けを求めるのはだめ母、自分で自分の首を絞める。」

		「頑張ってサークルに参加、人見知り、自己嫌悪、行かなければよかった、参加しないと喋れないジレンマ。」「オムツ入れてさ、おやつ入れて、お弁当作ってさ」とか思って。それはすごいなんか、いつもなんか悲しくなるんですよね。頑張って行ったのにね。」
質問 13	精神的に追い詰められたように感じていた。	「虐待―はっと気づいたらここまで手がいった。意識朦朧、ぎりぎりのところまで追い詰められていた。」
		「もう肉体的にも精神的にも追い詰められていて、もういつ私こどもを殺してもおかしくない状態でした。」
		「普通じゃ思いつかないことを思い立つ（よくないこと）、虐待、マンションから飛び降りたら楽、切迫感、睡眠不足、追われている、夫仕事で忙しい、夫遅く帰って早く出る、大人としゃべれない。」

①身体的負担に対するサポートの欠如に含まれる質問１、２、３、４の項目は、母親の肉体的な負担を軽減するための行政からのサービスや、家族からのサポートが十分にあったかどうかなどの、物理的な孤立を測るための指標になっている。

質問１の項目を設定したのは、表３の語りより、同居する家族、特にパートナーからの育児への協力が、母親の身体的負担を軽減するためには必要だと考えたためである。夫からの協力がない場合、母親の身体的な負担が重くなることが考えられる。語りの中では、夫について言及されているものが多いが、両親と同居している場合も考慮して、質問文は同居する家族としている。

質問２の項目を設定したのは、表３の語りより、育児サービスが、多胎家庭が利用できるように整っていることは、母親の身体的負担を軽減するためには必要だと考えたためである。表３の語りからは、多胎家庭の育児をサポートするサービスがあった場合も、母親の身体的負担が十分には解消されていないことがわかる。

質問３の項目を設定したのは、表３の語りより、育児のサポートが十分でない場合、母親が身辺を整えるなどの、自分の時間を持てないほど、育児の負担が大きかったことがわかるためである。

質問４の項目を設定したのは、表３の語りより、身体的負担に対するサポートの不足が、母親を体力的な限界にまで追い詰めることが分かったからである。

②友人、家族などの大人とのコミュニケーションの欠如に含まれる質問５、６、７、８、９の項目は、周囲の人との繋がりを感じられないことや、相手と満足のいくコミュニケーションが取れないなど、人間関係からの孤立を測るための指標になっている。

質問５の項目を設定したのは、表３の語りより、外に出た際に周囲から理解が得られなかったことや、周囲に打ち解けることができなかったなど、疎外感を感じていたことが分かったである。

質問６の項目を設定したのは、表３の語りより、多胎の母親が家族以外の第三者と関わった時にかけられた言葉に、嫌な思いをする、傷つくことがあるということは、人間関係からの孤立につながると考えたからである。表３の語りからは、多胎の母親が家族以外の第三者から言われた言葉に嫌な思いをする、傷つくことがあることがわかる。

質問７、質問８の項目を設定したのは、本来なら一番近しい関係にある家族に対して、育児への協力を求めることが多いと考えられるが、表３の語りのような経験をした場合、それ以降母親は、傷つく言葉を言った本人には協力を求めづらくなり、家族の中でも母親が感じる孤独感が増すのではないかと考えたからである。

質問９の項目を設定したのは、表３の語りより、同居する家族、特にパートナーと十分なコミュニケーションを取れないことは、母親の孤独感につながると考えたからである。

③心理的サポートの欠如に含まれる質問１０、１１、１２、１３の項目は、母親が抱える悩みや不安、ストレスなどを解消できず、抱え込んでしまうなど、精神的な孤立を測るための指標になっている。

質問１０の項目を設定したのは、表３の語りより、多胎の母親は、同じ多胎育児を経験した人などを相談相手として必要としているが、周囲にそのような人はおらず、悩みや不安を解消できなかったことが分かったからである。

質問１１の項目を設定したのは、表３の語りより、家族から多胎育児に対して理解がないことは、母親のストレスになることが分かったからである。

質問１２の項目を設定したのは、表３の語りより、育児での頑張りが報われないことは、母親が自分で自分のことを責めてしまうことにつながると分かったからである。

質問１３の項目を設定したのは、表３の精神的に追い詰められ、虐待ギリギリの状態であったという語りから、追い詰められるほど、精神的に孤立することがあることが分かったからである。

3-3 アンケート対象・方法

アンケートを実施する上で、多胎育児の支援事業を行う NPO 法人（特定非営利活動法人）『つなげる』の協力を得た。NPO 法人『つなげる』とは、ピアサポーターの養成、多胎家庭のつながりの場を提供するオンラインコミュニティーの運営、多胎家庭へのアンケート調査など、多胎育児に対する支援事業を行なっている団体である。NPO 法人『つなげる』が運営するオンラインコミュニティーの一つに『ふたごのへや』というものがある。『ふたごのへや』は LINE のオープンチャット機能を活用したサービスであり、多胎の母親、もしくは父親であれば誰でも参加することができる無料のオンラインコミュニティである。参加するためには、管理者の承認が必要になっている。このコミュニティには 2020 年 9 月末時点で、755 名が参加している。（NPO 法人つなげる(2020)）

アンケートはこの『ふたごのへや』に参加している多胎家庭を対象にアンケートを実施した。『ふたごのへや』に参加している多胎家庭に年齢の制限や地域の制限はなく、多胎の親であれば誰でも参加することができる。また、参加する際には管理者の承認が必要になるため、多胎家庭の親以外の人の回答がアンケートに混ざっているの可能性は低いと考えられる。

アンケート方法について、実施期間は 2020 年 10 月 18 日から 2020 年 10 月 23 日に実施した。Google フォームで作成したアンケートの URL を『ふたごのへや』のオープンチャットで流してもらい、オンライン上で回答を募った。以下はアンケートの依頼文である。

『初めまして。 神戸大学経営学部 4 回生の榊真緒です。
私は大学のゼミがきっかけで、多胎家庭の支援を行う NPO 法人つなげるさんの活動を知りました。 多胎家庭が抱える悩みを聞いたことで何か協力したいと思うようになり、現在は一緒にプロジェクト活動をしています。
また現在、多胎家庭をテーマにした卒業論文を書いています。 このテーマについて研究をする上で、私自身多胎育児を経験したことがないため、わからないことがたくさんあります。 そのため皆さんが経験してきたことを、教えていただけると嬉しいです。 育児やお仕事でお忙しいとは思いますが、アンケートの回答にご協力いただけませんか？
よろしくお願いします。
＜アンケート URL＞
https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfHLd2-RlokfceDOm8RIkPDX_qdQEvcr6XTmNNuQrtaXkGEaQ/viewform
＜期間＞10/23（金）まで

アンケートは 13 項目、全て選択形式で 5 分～10 分程度で回答できる簡単なものになっています。
その他詳細はアンケートに記載しています。 何がご不明な点がある場合は、下記のアドレスまでお気軽にご連絡ください。
メールアドレス：（注：アドレスは省略） 榊 真緒』

3-4 回答方法

ここでは 3-2 質問項目に対する、回答方法を説明する。1 つの質問に対して、5 つの年齢区分を設けている。その年齢区分はⅰ.妊娠から出産、ⅱ.出産から 2、3 ヶ月、ⅲ. 動き出してから、ⅳ.話しだしてから、ⅴ.イヤイヤ期の 5 つである。回答者には 5 つそれぞれの年齢区分において、【当てはまる】、【やや当てはまる】、【どちらでもない】、【あまり当てはまらない】、【当てはまらない】の 5 つの選択肢から、自分に最も当てはまるものいずれか一つを回答してもらう。

3-4-1 年齢区分

実施したアンケートでは、一つ一つの質問項目に対して、5 つの年齢区分を設けている。5 つの年齢区分は以下の表 4 にある、ⅰ.妊娠から出産、ⅱ.出産から 2、3 ヶ月、ⅲ. 動き出してから、ⅳ.話しだしてから、ⅴ.イヤイヤ期の 5 つである。
区分を設ける意図としては、子供の成長の段階によって違いが表れるのかを明らかにするためである。年齢区分は、日本多胎支援協会(2018)を参考に、多胎の成長に応じて、生活リズムの変化を考慮している。

表 4. 年齢区分の説明

年齢区分	説明
ⅰ. 妊娠から出産	多胎を妊娠してから出産までの期間
ⅱ. 出産から 2、3 ヶ月	出産して多胎から一日中、目が離せない状態の期間
ⅲ. 動き出してから	赤ちゃんがはいはいをする、つかまり立ち、歩くなど
ⅳ. 話しだしてから	赤ちゃんとコミュニケーションが取れる、話すなど
ⅴ. イヤイヤ期	赤ちゃんの自己主張が強くなり子育てが思い通りにいかない時期

「ⅰ.妊娠から出産」は多胎を妊娠してから出産までの期間を示す。「ⅱ.出産から 2、3 ヶ月」は、出産から、一日中付きっきりで目が離せない、主に新生児期あたりを示してい

る。2、3ヶ月と記述しているのは、新生児は生後28日未満の乳児のことではあるが、多胎児の場合5割が早産児、7割が低出生体重児を考慮し、「ⅱ.出産から2、3ヶ月（一日中、目が離せない状態）」と記載している。「ⅲ.動き出してから」は赤ちゃんがはいはいをする、つかまり立ちをする、歩くなど、自分で動けるようになったときを示す。「ⅳ.話しだしてから」は、赤ちゃんが言葉を発するようになる、まだ話すことはできないが、感情がわかるようになるなど、コミュニケーションが取れることを示す。「ⅴ．イヤイヤ期」は赤ちゃんに自我が芽生え、自己主張が強くなり、子育てが思うようにいかない時期のことを示す。

3-4-2 回答選択肢

アンケートの回答者は一つの質問につき、ⅰからⅴの年齢区分で、【当てはまる】、【やや当てはまる】、【どちらでもない】、【あまり当てはまらない】、【当てはまらない】の5つの選択肢からいずれかを回答してもらう。

それぞれの選択肢について説明すると、【当てはまる】は、その状態が日常的に続いていた・何度も経験がある場合、該当する。【やや当てはまる】はその状態がたまににあった・数回経験がある場合、該当する。【どちらでもない】は、他の選択肢に当てはまらない場合、該当する。【あまり当てはまらない】はその状態はあまりないが、経験したことはある場合、該当する。【当てはまらない】はその状態はなかった・経験したこともない場合、該当する。

それぞれの項目に、【当てはまる】は2点、【やや当てはまる】は1点、【どちらでもない】は0点、【あまり当てはまらない】は-1点、【当てはまらない】は-2点の点数を設定することで、回答を数値化することができる。

なお、質問１、質問２、質問１０、質問１１は反転項目である。そのため、回答を数値化する際、【当てはまる】-2点、【やや当てはまる】は-1点、【どちらでもない】は0点、【あまり当てはまらない】は1点、【当てはまらない】は2点のように、他の項目とは逆の数値設定にしている。

多胎家庭によっては、まだ特定の年齢区分に該当する時期に達していないため、回答することができない項目があると考えられる。その場合、【どちらでもない】の選択肢を回答してもらう。例えば回答する多胎家庭の子どもが生後8ヶ月、はいはいはできるが、まだ話せず、イヤイヤ期もきていないという場合、ⅰⅱⅲの区分は自身の当てはまるものを選択肢から回答してもらい、ⅳⅴの区分については【どちらでもない】を選択してもらうこととする。

以下の表５は、回答の選択肢、選択肢に対応する点数、選択肢の説明を表したものである。

表 5. 回答選択肢の説明

回答の選択肢	点数	説明
【当てはまる】	2	その状態が日常的に続いていた・何度も経験がある
【やや当てはまる】	1	その状態がたまににあった・数回経験がある
【どちらでもない】	0	他の選択肢に当てはまらない場合
【あまり当てはまらない】	-1	その状態はあまりないが、経験したことはある
【当てはまらない】	-2	その状態はなかった・経験したこともない

第４節 分析結果・考察

第３節で説明したアンケートを実施した結果、368 件の有効な回答を得ることができた。アンケート結果は、データとして Excel ファイルにまとめた。データにする際、質問１～１３質問項目は年齢区分ｉ～ｖに応じて、表６のように変数に置き換えている。

表 6. 変数名と変数名の説明

変数名	変数名の説明
ｉ同居家族の協力 ～ ｖ同居家族の協力	質問１のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数
ｉサービスの充実 ～ ｖサービスの充実	質問２のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数
ｉ自分の時間 ～ ｖ自分の時間	質問３のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数
ｉ体力的限界 ～ ｖ体力的限界	質問４のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数
ｉ疎外感 ～ ｖ疎外感	質問５のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数
ｉ知らない人の言葉 ～ ｖ知らない人の言葉	質問６のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数

ｉ別居家族の言葉 ～ ｖ別居家族の言葉	質問７のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数
ｉ同居家族の言葉 ～ ｖ同居家族の言葉	質問８のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数
ｉ同居家族との意思疎通 ～ ｖ同居家族との意思疎通	質問９のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数
ｉ相談者の存在 ～ ｖ相談者の存在	質問１０のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数
ｉ家族からの理解 ～ ｖ家族からの理解	質問１１のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数
ｉ自己嫌悪 ～ ｖ自己嫌悪	質問１２のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数
ｉ精神的追い詰め ～ ｖ精神的追い詰め	質問１３のそれぞれ年齢区分ｉ～ｖから作成した-2 から２の値を取る変数

4-1 記述統計

ここではアンケート結果の記述統計から読み取れる、多胎家庭の孤立の実態を説明する。データの基本統計量をまとめたものが表７である。質問１～13 の年齢区分ｉ～ｖについて、表６の変数で表記しており、標本数、平均値、中央値、標準偏差、最小値、最大値をまとめている。

表 7. 質問１～13 の基本統計量

変数名	ｉ同居家族の協力	ii同居家族の協力	iii同居家族の協力	iv同居家族の協力	ｖ同居家族の協力	ｉサービスの充実	ii サービスの充実	iii サービスの充実	iv サービスの充実	ｖサービスの充実
標本数	368	368	368	368	368	368	368	368	368	368
平均値	-1.429	-1.533	-1.063	-0.576	-0.429	0.832	0.628	0.609	0.639	0.560
中央値	-2	-2	-1	0	0	1	1	1	0	0
標準偏差	1.073	0.930	1.160	1.222	1.211	1.408	1.536	1.406	1.203	1.156
最小値	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2
最大値	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

変数名	ｉ自分の時間	ii自分の時間	iii自分の時間	iv自分の時間	ｖ自分の時間	ｉ体力的限界	ii体力的限界	iii体力的限界	iv体力的限界	ｖ体力的限界
標本数	368	368	368	368	368	368	368	368	368	368
平均値	0.633	1.304	0.842	0.299	0.185	0.747	1.761	1.160	0.394	0.361
中央値	1	2	1	0	0	1	2	2	0	0
標準偏差	1.465	1.289	1.386	1.297	1.267	1.444	0.662	1.102	1.257	1.254
最小値	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2
最大値	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

変数名	ｉ疎外感	ii疎外感	iii疎外感	iv疎外感	ｖ疎外感	ｉ知らない人の言葉	ii知らない人の言葉	iii知らない人の言葉	iv知らない人の言葉	ｖ知らない人の言葉
標本数	368	368	368	368	368	368	368	368	368	368
平均値	-0.068	0.929	0.579	0.095	0.054	-0.402	0.011	0.003	-0.228	-0.245
中央値	-1	1.5	1	0	0	-1	0.5	0	0	0
標準偏差	1.537	1.409	1.404	1.283	1.247	1.587	1.629	1.519	1.338	1.274
最小値	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2
最大値	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

変数名	ⅰ別居家族 の言葉	ⅱ別居家族 の言葉	ⅲ別居家族 の言葉	ⅳ別居家族 の言葉	ⅴ別居家族 の言葉	ⅰ同居家族 の言葉	ⅱ同居家族 の言葉	ⅲ同居家族 の言葉	ⅳ同居家族 の言葉	ⅴ同居家族 の言葉
標本数	368	368	368	368	368	368	368	368	368	368
平均値	-0.715	-0.372	-0.723	-0.630	-0.595	-0.780	-0.500	-0.573	-0.644	-0.606
中央値	-2	-1	-1	-1	0	-2	-1	-1	-1	0
標準偏差	1.586	1.661	1.422	1.235	1.187	1.525	1.611	1.491	1.264	1.213
最小値	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2
最大値	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

変数名	ⅰ同居家族との意思疎通	ⅱ同居家族との意思疎通	ⅲ同居家族との意思疎通	ⅳ同居家族との意思疎通	ⅴ同居家族との意思疎通	ⅰ相談者の存在	ⅱ相談者の存在	ⅲ相談者の存在	ⅳ相談者の存在	ⅴ相談者の存在
標本数	368	368	368	368	368	368	368	368	368	368
平均値	-0.511	0.166	-0.163	-0.413	-0.389	0.356	0.261	-0.043	-0.073	-0.076
中央値	-1	1	0	0	0	1	1	0	0	0
標準偏差	1.475	1.542	1.451	1.248	1.201	1.604	1.616	1.496	1.342	1.304
最小値	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2
最大値	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

変数名	ⅰ家族からの理解	ⅱ家族からの理解	ⅲ家族からの理解	ⅳ家族からの理解	ⅴ家族からの理解	ⅰ自己嫌悪	ⅱ自己嫌悪	ⅲ自己嫌悪	ⅳ自己嫌悪	ⅴ自己嫌悪	ⅰ精神的追い詰め	ⅱ精神的追い詰め	ⅲ精神的追い詰め	ⅳ精神的追い詰め	ⅴ精神的追い詰め
標本数	368	368	368	368	368	368	368	368	368	368	368	368	368	368	368
平均値	-0.946	-1.090	-0.880	-0.514	-0.424	-0.313	0.750	0.649	0.217	0.269	-0.052	1.054	0.636	0.090	0.174
中央値	-1	-2	-1	0	0	-1	1	1	0	0	-1	2	1	0	0
標準偏差	1.346	1.279	1.309	1.300	1.250	1.655	1.539	1.461	1.372	1.321	1.607	1.330	1.442	1.329	1.309
最小値	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2
最大値	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

表7から読み取れる全体的な傾向として、標本数、最小値、最大値は全ての変数において同じ数値を示している。平均値、中央値、標準偏差は項目によって異なる。

平均値について、変数のとる値が2に近いほど、その項目における物理的な孤立、人間関係からの孤立、もしくは精神的な孤立の傾向が強く、変数のとる値が-2に近いほど、孤立の傾向は弱いと言える。

それを踏まえて、平均値が正の値を示しているのは、ⅰ～ⅴのサービスの充実、ⅰ～ⅴの自分の時間、ⅰ～ⅴの体力的限界、ⅱ～ⅴの疎外感、ⅱとⅲの知らない人の言葉、ⅱ同居家族との意思疎通、ⅰとⅱの相談者の存在、ⅱ～ⅴの自己嫌悪、ⅱ～ⅴの精神的追い詰めの計32項目である。

一方、平均値が負の値を示しているのは、ⅰ～ⅴの同居家族の協力、ⅰ疎外感、ⅰ、ⅳ、ⅴの知らない人の言葉、ⅰ～ⅴ別居家族の言葉、ⅰ～ⅴの同居家族の言葉、ⅰ、ⅲ、ⅳ、ⅴの同居家族との意思疎通、ⅲ、ⅳ、ⅴの相談者の存在、ⅰ～ⅴの家族からの理解、ⅰ自己嫌悪、ⅰ精神的追い詰めの計33項目である。

変数によっては、ⅰ～ⅴの全ての年齢区分の平均値が正の値、もしくは負の値をとるものもあれば、年齢区分によって、正負が異なるものもある。正負が年齢区分によって異な

る変数は、疎外感、知らない人の言葉、同居家族との意思疎通、相談者の存在、自己嫌悪、精神的追い詰めである。

4-2 それぞれの質問項目

ここでは質問１から１３、それぞれの質問項目について、年齢区分ｉ～ｖにおける、回答の選択肢ごとの割合をグラフに示した。グラフから読み取れること、それに対する解釈、考察をそれぞれの質問項目で行なった。

図１は、質問１の年齢区分ｉ～ｖにおける、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、ｉ、ⅱにおいて、9 割以上が【当てはまる】、もしくは【やや当てはまる】を選択しており、ⅱの区分が 2 つの割合を合わせて 91%と最も高いことがわかる。ⅲ、ⅳ、ｖの区分にかけては、【どちらでもない】の回答が増えており、ⅲで 12%、ⅳで 35%、ｖで 42%であり、【当てはまる】、【やや当てはまる】の割合は減少傾向にある。一方で、ⅲ、ⅳ、ｖの区分にかけて【当てはまらない】の割合がわずかではあるが、増えている。

質問１の解釈として、特に子どもが小さい間は、同居する家族から育児に対する協力を得られている人は多いとわかる。一方で、もっとも近しい存在の同居する家族から、十分な協力が得られていない人が 10%前後いることも事実である。また子供が成長するにつれて、協力が減っていく傾向が見られる。

この分析結果から考えられるのは、子どもが生まれて間もない時期は、母親以外の家族の意識も子育てに向いているが、成長するにつれて、その意識が弱くなっているのではないかということである。日本多胎支援協会（2018）で取り上げられている母親の語りに、『2 歳ごろからも”子育てにだいぶ慣れたからもういいや”と手伝いから自分の世界に戻ってしまう』や、『両親も 2 歳ぐらいになると”もういいよね”ということで、(母親が)孤立する』という記述がある。この語りから、子どもが成長するにつれて、協力が手薄くなっていくことが考えられる。

質問１以降に出てくる質問項目について、【どちらでもない】の選択肢はそれぞれ、ⅲでは 12%前後、ⅳでは 35%前後、ｖでは 40%前後の一定の割合を占めている。このことは、【どちらでもない】を選択した回答者はまだその年齢区分を経験していない、もしくは他の選択肢には当てはまらないことを意味している。このことは質問２以降にも共通している。

図 1. 質問１の年齢区分ｉ～ｖにおける回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

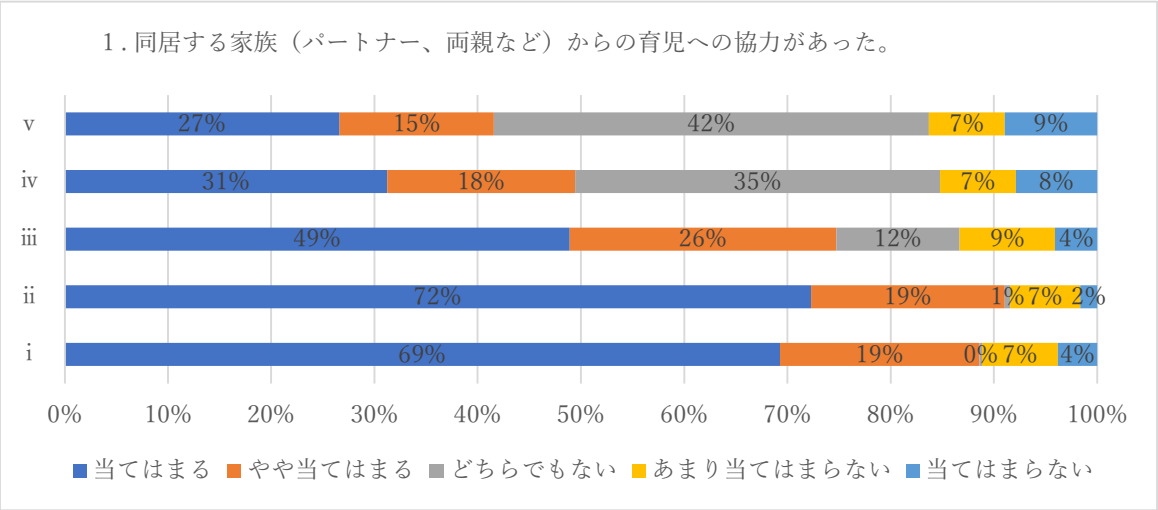


図２は、質問２の年齢区分ｉ～ｖにおける、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、【どちらでもない】を除いて、ｉからｖの全ての区分で、【当てはまらない】の割合が最も多く、その割合は約半数を占めており、増加傾向にある一方で、【当てはまる】の割合は減っている。【どちらでもない】はｉ、ⅱの項目において、他の質問項目では、0%から 2%であるが、質問２では 5%と他の質問項目よりも割合が多い。

質問２の解釈として、全ての年齢区分において困った時に頼れるサービスが整っていない場合の方が多く、子供が成長するにつれてサービスが整っていないと答える割合が増えていることがわかる。

この分析結果から考えられる、ｉ、ⅱの区分で他の質問よりも【どちらでもない】が多い理由は、サービス自体はあるが、母親が利用するまでに至っていない場合があるということである。これを裏付けるように、実施したアンケートの自由記述の回答において、「サービス自体はあったが、なかなか利用するところまでたどり着けない」と言った内容の回答が複数見受けられた。

図 2. 質問２の年齢区分ｉ～ｖにおける回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

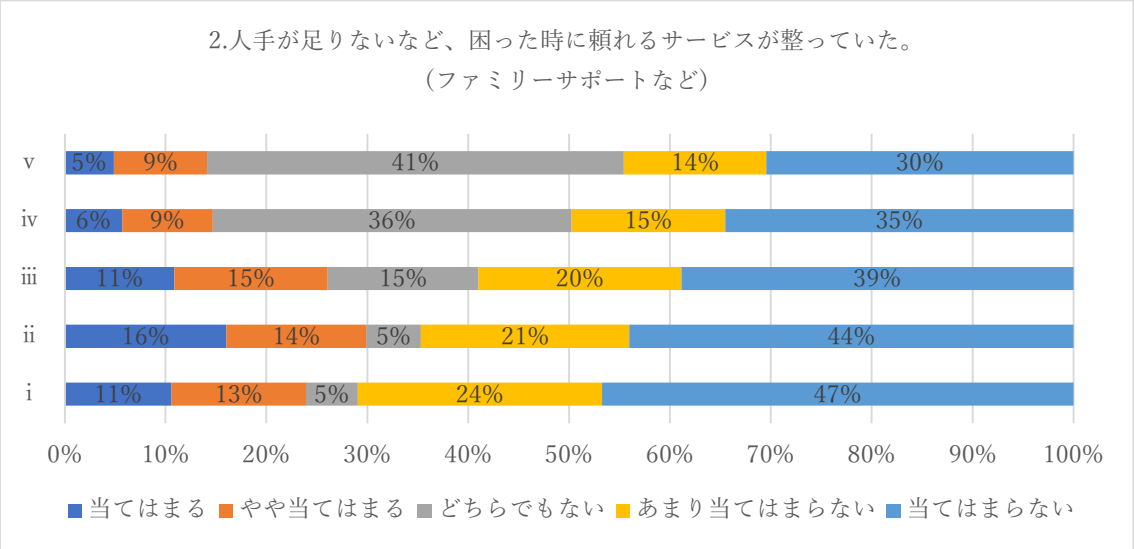


図３は、質問３の年齢区分ｉ～ｖにおける、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、妊娠中と出産後では大きな変化が見られ、【当てはまる】がｉでは 39%であるのに対して、ⅱでは 69%と 20%も増えている。ⅲでは 46%に減り、ⅳ、ｖではさらにその半分程度に落ち着いている。【当てはまらない】は 10%から 15%の数値であり、ⅱからｖにかけて、少しずつ増えている。ⅳとｖにおいては、全体的に似た割合を示している。

質問３の解釈として、妊娠中と出産後では大きな変化が見られ、出産後約 2、３ヶ月の期間、母親が自分の時間を持てていることは少なく、子供が成長にするにつれて母親自身のための時間が持てるようになっている傾向があることがわかる。

この分析結果から考えられるのは、妊娠中の母体への負担も大きいが、出産後は子どもが増えたことや、出産後の体力が戻っていない状態での育児の開始などにより、母親への負担がかなり大きいということである。子供が成長にするにつれて母親の時間を持てるようになっている理由としては、育児に対する慣れや、子どもが成長したことで、育児における負担が減ったということが考えられる。

図 3. 質問３の年齢区分ｉ～ｖにおける回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

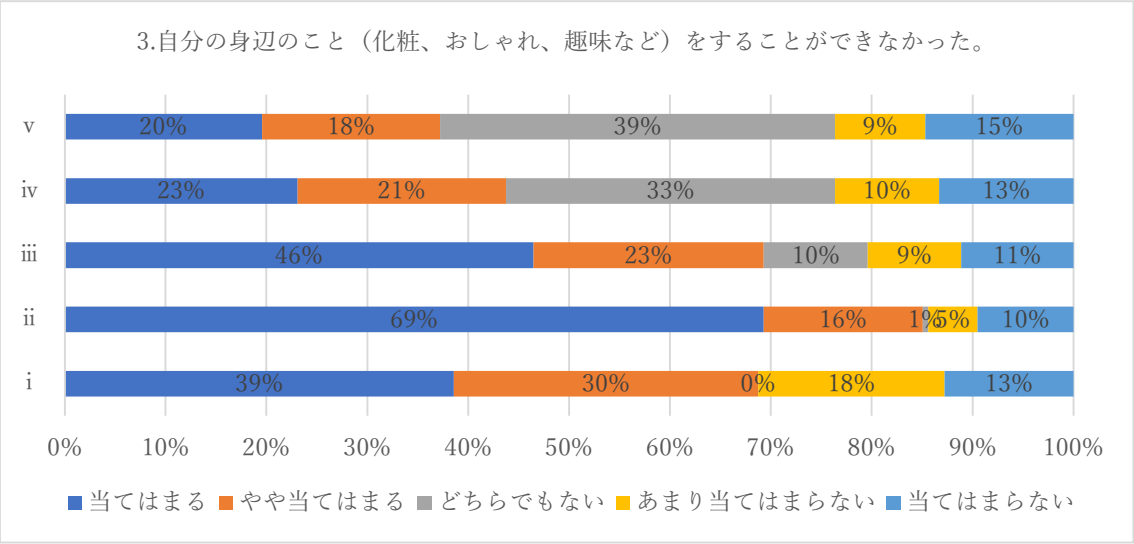


図４は、質問４の年齢区分ｉ～ｖにおける、回答の選択肢ごとの割合を％で示した図である。ここから読み取れることとして、妊娠中と出産後では大きな変化が見られ、【当てはまる】がｉでは 43%であるのに対して、ⅱでは 84%と倍近くにまで増えている。また、【当てはまる】【やや当てはまる】を合わせると、その割合は 96%にも及ぶ。ⅲでは【やや当てはまる】の割合がⅱよりも増えているが、【当てはまる】【やや当てはまる】を合わせると、79%であり、多くの割合を占めている。ⅳ、ｖは全体的に似た割合を示しており、【どちらでもない】を除いた場合、【当てはまる】【やや当てはまる】の割合を合わせると、依然として７割近くを占めている。

質問４の解釈として、質問２と同様に、妊娠中と出産後では大きな変化が見られ、出産後約２、３ヶ月の期間、ほとんどの母親は体力的な限界を感じていることがわかる。子供が成長にするにつれて、その割合は減ってはいるが、高い割合の母親が体力的な限界を感じている。

この分析結果から考えられるのは、質問３と同じように、妊娠中の母体への負担も大きいが、出産後は子どもが増えたことや、出産後の体力が戻っていない状態での育児の開始などにより、母親への負担がかなり大きいということである。

図 4. 質問４の年齢区分ｉ～ｖにおける回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

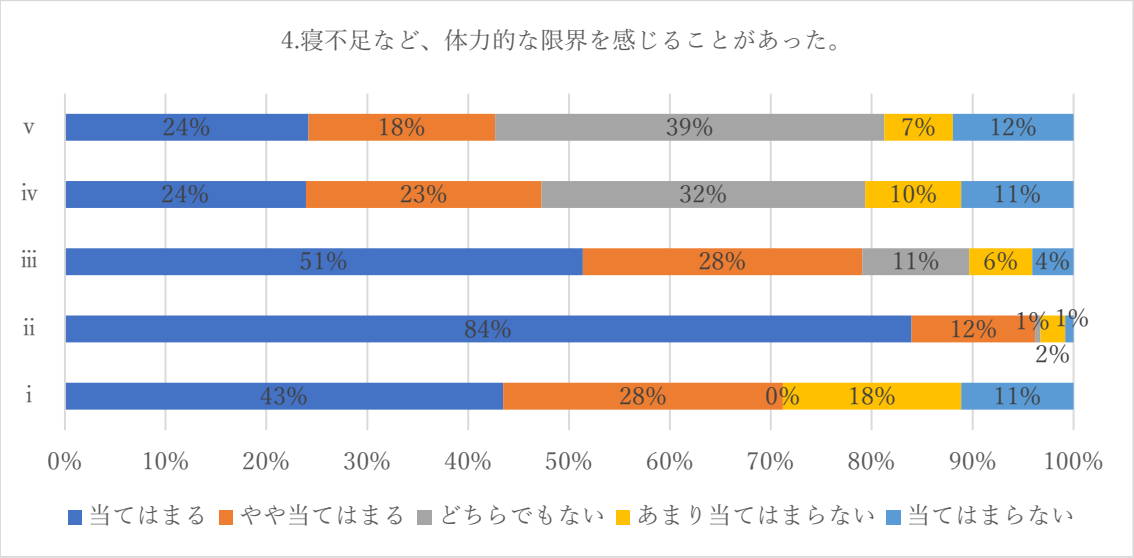


図５は、質問５の年齢区分ｉ～ｖにおける、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、ｉでは【どちらでもない】を除いて、回答がそれぞれの選択肢に均等に分散している。ｉとⅱでは大きな変化が見られ、【当てはまる】がｉでは22%であるのに対して、ⅱでは50%と倍近くにまで増えている。また、【当てはまる】【やや当てはまる】を合わせると、その割合は77%である。ⅲでは【当てはまる】【やや当てはまる】を合わせると、62%であり、多くの割合を占めている。ⅳ、ｖは全体的に似た割合を示している。【当てはまる】はⅲと比較して半分の割合まで減っている。

質問５の解釈として、妊娠中は半数近くが、疎外感を感じており、出産後は大きな変化が見られ、出産後約２、３ヶ月の期間、７割を超える母親が周りからの疎外感を感じていることがわかる。子どもが成長するにつれて、母親が疎外感を感じる割合は減っている。

この分析結果についての考察をまとめると、ｉで回答が均等に分かれているのは、多胎家庭が暮らしている地域などの影響があると考えられる。暮らしている地域によって、病院での多胎の妊婦に対するサポート体制や、周りに同じ多胎の妊婦がいるかなどが異なり、それが母親の感じる疎外感に影響していると思われる。また、ⅱの区分で特に疎外感を感じている人が多く、子どもが成長するにつれてその割合が減っているのは、外出の有無が関係しているのではないかと考えれる。多胎育児に関する文献の中でも、多胎家庭の外出困難については度々言及されており、外出できないことから周囲からの疎外感を感じているのではないかと考えられる。

図５. 質問５の年齢区分ｉ～ｖにおける回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

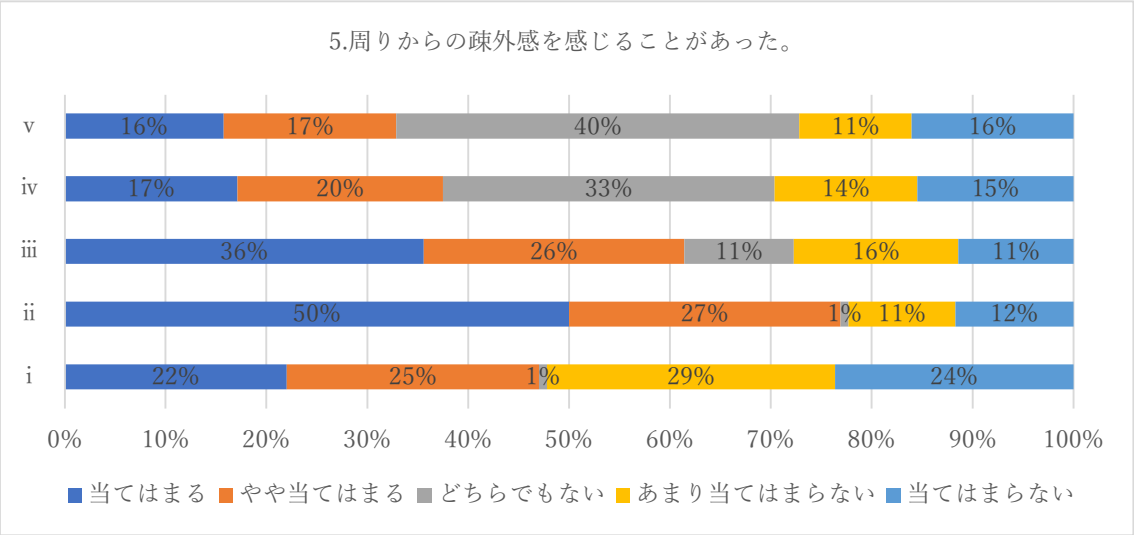


図 6 は、質問 6 の年齢区分 i ～ v における、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、 i では【あまり当てはまらない】【当てはまらない】の合計は 61%の割合を占めている。 ii では、【当てはまる】【やや当てはまる】の合計が 50%、【あまり当てはまらない】【当てはまらない】が 48%と、回答が二分化している。 iii でも【当てはまる】と【やや当てはまる】、【あまり当てはまらない】【当てはまらない】の合計はそれぞれ 44%と回答が二分化している。 iv、 v では【あまり当てはまらない】【当てはまらない】が【当てはまる】【やや当てはまる】よりも多くの割合を占めている。

質問 6 の解釈として、妊娠期は第三者から嫌な言葉をかけられることはないことの方が多いが、出産してから子どもが歩き出す頃までは、このような経験をする母親は半々であり、それ以降は子どもの成長とともに、嫌な言葉をかけられることは減っていくことがわかる。

この分析結果についての考察は、多胎の母親は街中で知らない人に声をかけられる機会が多く、その際、多胎に対する知識が何もない人がかけた何気ない一言が、多胎の母親を傷つけることにつながっているのではないかと考えられる。筆者が多胎の母親に話を聞いた際、双子のベビーカーを押しているとよく声知らない人に声をかけられるという話を聞いた。 1 人用のベビーカーに比べて、大きく目立ちやすい双子ベビーカーを見つけた際に、興味本位で声をかけ放った一言が、場合によっては多胎の母親を傷つける言葉になっていると考えられる。子どもが成長するにつれて減っていくのも、多胎がベビーカーに乗って出かける機会が、減っていくことが関係しているのではないかと考えられる。

図 6. 質問 6 の年齢区分 i ～ v における回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

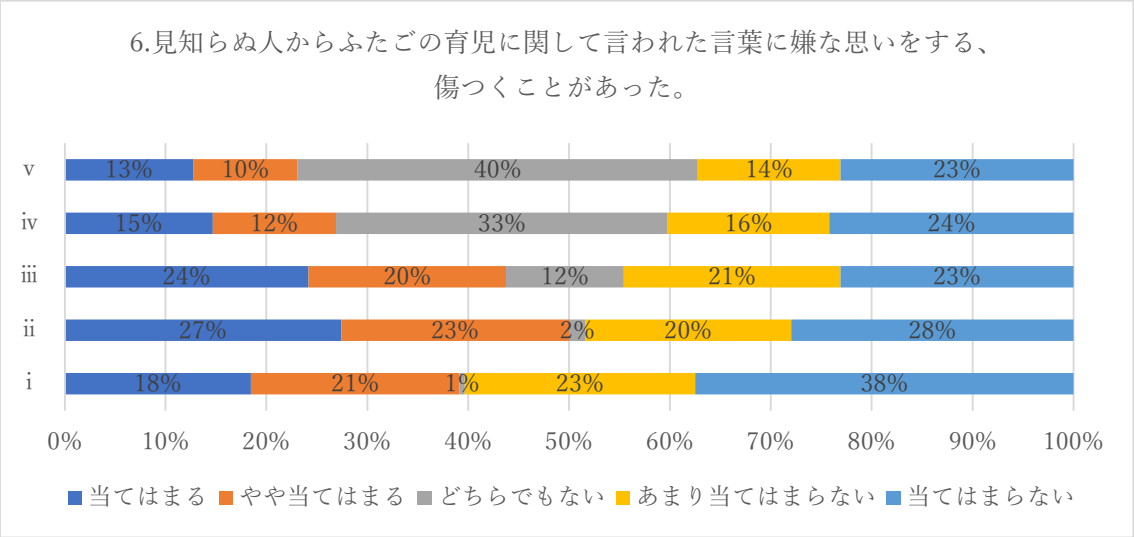


図 7 は、質問 7 の年齢区分 i ～ v における、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、【どちらでもない】を除いた場合、ii 以外では、【当てはまらない】が約半数の割合を占めている。【当てはまる】【やや当てはまる】の占める割合については、 i では 32%、ii では 40%、iii では 24%、iv では 17%、 v では 14%と、 ii で最も多くの割合を占めており、それ以降は減っていく傾向がある。

質問 7 の解釈として、同居していない家族から嫌な言葉をかけられる経験はないと答える割合の方が多いが、出産後約 2、 3 ヶ月の期間は他の時期に比べて、その経験をした母親が最も多く、子どもが成長するにつれて、嫌な言葉をかけられることは減っていくことがわかる。

この分析結果についての考察は、出産後約 2、 3 ヶ月の期間に、同居していない家族からかけられた言葉に傷つく経験が多いのは、同居していないため多胎に対する知識が、同居している家族よりも少なく、その結果、母親が傷つく言葉を発してしまっているのではないかと考えられる。

図 7. 質問 7 の年齢区分 i ～ v における回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

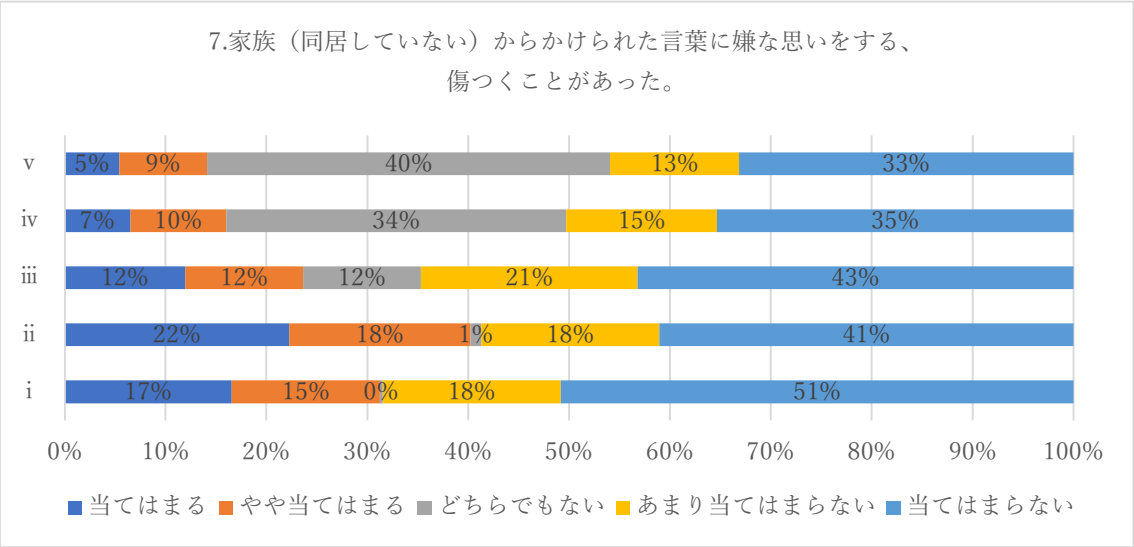


図８は、質問８の年齢区分ｉ～ｖにおける、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、全体的には質問７と同じ傾向にある。特に質問７と比較した違いは、ⅲの区分であり、【どちらでもない】を除いて、【当てはまる】【やや当てはまる】の割合が質問７よりも増えて、【あまり当てはまらない】【当てはまらない】の占める割合が減っている。その他の区分に関しては、【どちらでもない】を除いた場合、【当てはまる】はⅲでのみ増えており、【やや当てはまる】はｉ以外で増えている。【あまり当てはまらない】はⅲ、ⅳ、ｖでは減っており、【当てはまらない】はⅱ、ⅳ、ｖでは増えて、ⅲでは減っている。

質問８の解釈として、全体的には質問７と同じ傾向にあるが、子どもが動き出す頃の時期にかけては、同居する家族から嫌な言葉をかけられることが、質問７の場合よりも増えていることがわかる。

この分析結果についての考察は、ｉ、ⅱ、ⅲの区分において、質問７より嫌な言葉をかけられることが少ないのは、同居していない家族よりも、同居している家族の方が多胎の育児に対する理解や知識があるためだと考えられる。

また、質問４の結果からわかるように、育児の負担から体力的な限界を感じている場合、精神的な余裕もなく、言葉に対して敏感に反応するようになっているのではないかということも考えられる。このことは母親だけではなく、同居する家族が育児を分担している場合、その家族も同じように感じていることも想像できる。この考えは、質問７にも共有していると思われる。

図 8. 質問 8 の年齢区分 i ～ v における回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

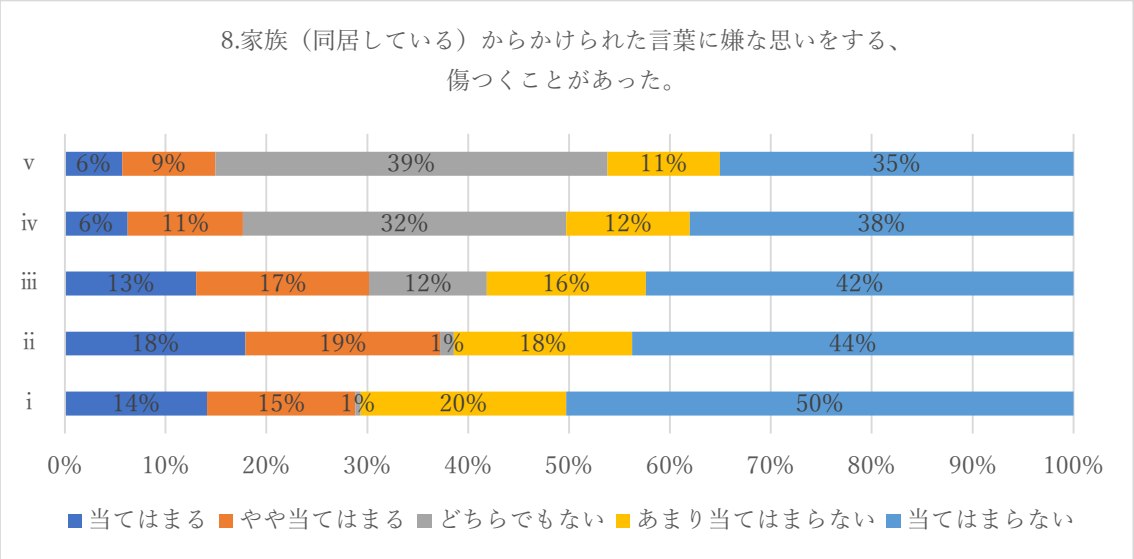


図 9 は、質問 9 の年齢区分 i ～ v における、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、ii の区分でのみ、【当てはまる】【やや当てはまる】の割合が半分を超えており、55%である。その他の区分はどちらでもないを除いた場合、【あまり当てはまらない】【当てはまらない】の合計の割合が半数を超えている。 i では、6 割が【あまり当てはまらない】【当てはまらない】を回答している。

質問 9 の解釈として、妊娠中は同居する家族と十分にコミュニケーションを取れている方が多いが、出産後約 2、 3 ヶ月ではそれが逆転して十分にコミュニケーションを取れていないことの方が多いことがわかる。それ以降はコミュニケーションを取れている方が多くなっている。

この分析結果についての考察は、子どもが生まれると母親の意識は子どもに向くようになることや、育児で子どもに向き合っている時間が増えることで、他の家族とコミュニケーションを取れる時間が減ってしまうからだと考えられる。子どもが成長するにつれて、子どもに付きっきりの時間が減り、母親も育児に慣れてきたことで、家族とコミュニケーションを取れるようになっていくと考えられる。

図 9. 質問 9 の年齢区分ｉ～ｖにおける回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

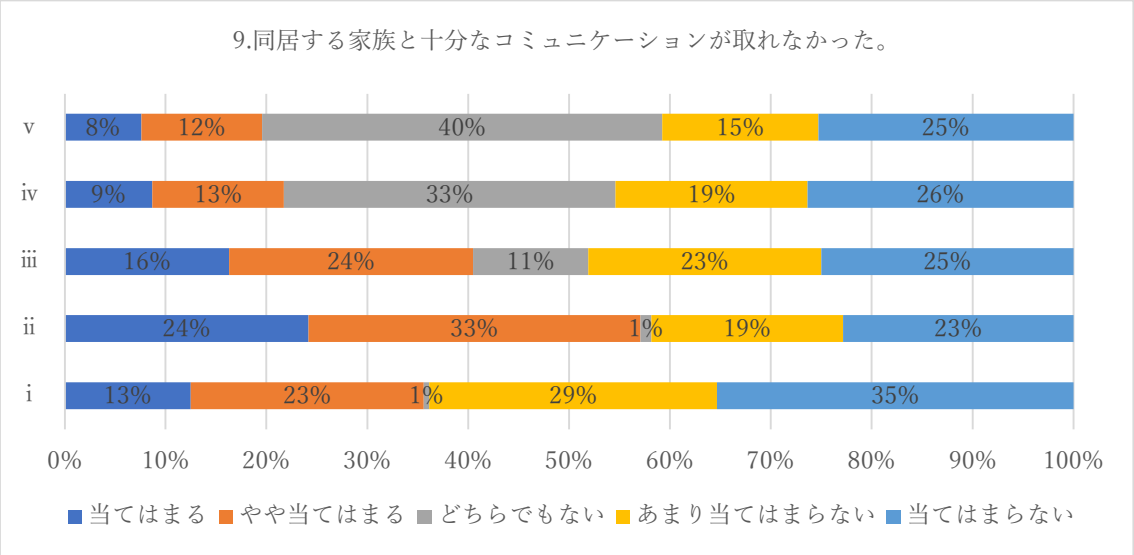


図 10 は、質問 10 の年齢区分ｉ～ｖにおける、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、【どちらでもない】を除いた場合、ｉからｖにかけて【当てはまる】、【やや当てはまる】の占める割合が増えており、【あまり当てはまらない】【当てはまらない】が占める割合が減っていく傾向が見られる。ｉでは【当てはまる】、【やや当てはまる】が 40%、【あまり当てはまらない】、【当てはまらない】が 60%であるのに対して、【どちらでもない】を除いた場合、ｖではその割合が逆転している。

質問１０の解釈として、妊娠中が最も相談できる人がいなかった時期であり、妊娠中、出産後約 2、3 ヶ月では相談できる人がいなかった割合が半数を超えていたが、それ以降、子どもが成長するにつれて、相談できる人がいる割合の方が増えていることがわかる。

この分析結果についての考察は、ｉ、ⅱの区分において、日本多胎支援協会（2018）によると『多胎の妊婦や母親は、妊娠中は安静指示・管理入院、出産後は外出困難感のために社会的に孤立しており』という記載があるように、母親の行動範囲が制限されるため、近くに相談できる人がいなければ、相談者を見つけることが難しいと考えられる。子どもが成長して、外に出られるようになることで、母親の行動範囲が広がることで、相談できる相手が見つかり、相談者がいなかったと答える割合が減っていると考えられる。

図 10. 質問 10 の年齢区分ｉ～ｖにおける回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

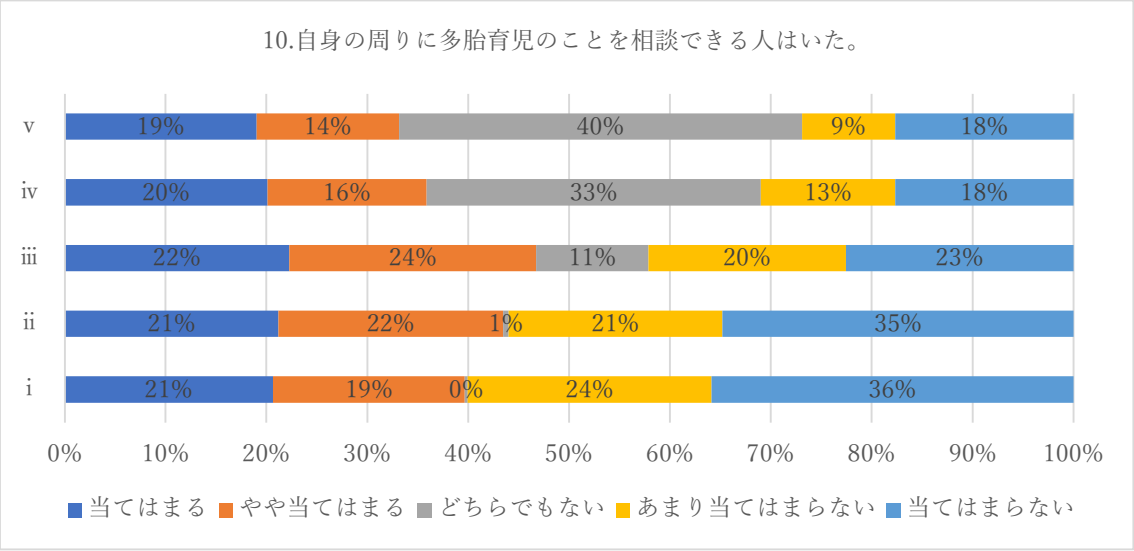


図 11 は、質問 11 の年齢区分ｉ～ｖにおける、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、【どちらでもない】を除いた場合、全ての区分において、【当てはまる】が半分近くの割合を占め、【やや当てはまる】も含めるとその割合は 7 割ほどを占める。ⅱでは、【当てはまる】【やや当てはまる】が 80%と最も多いが、ｉ以降の区分では、その割合は減り、【あまり当てはまらない】【当てはまらない】が増えている。

質問１１の解釈として、家族からの多胎育児に対して理解が得られている割合は全体的に多く、最も多いのは出産後２、３ヶ月の時期であることがわかる。一方で、子どもが成長して、話せるようになる時期や、イヤイヤ期に関しては、理解が得られている割合は少し下がっている。

この分析結果についての考察は、ⅳやｖの区分で感じる育児の負担は家族間でギャップがあるためだと考えられる。ⅱ、ⅲの区分に比べて負担は減ってはいると周りからは思われ、協力も手薄になってしまい、母親がⅳやｖの区分で感じている育児の負担が十分に理解されていないことが考えられる。

また、質問１での育児への協力と比較すると、育児への理解では、ｉとⅱでは【当てはまる】の割合が協力よりも 20%近く減っている。このことから、協力自体はあるが、それが理解に至っていないと母親は感じているのではないかということが考えられる。

図 11. 質問 11 の年齢区分ｉ～ｖにおける回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

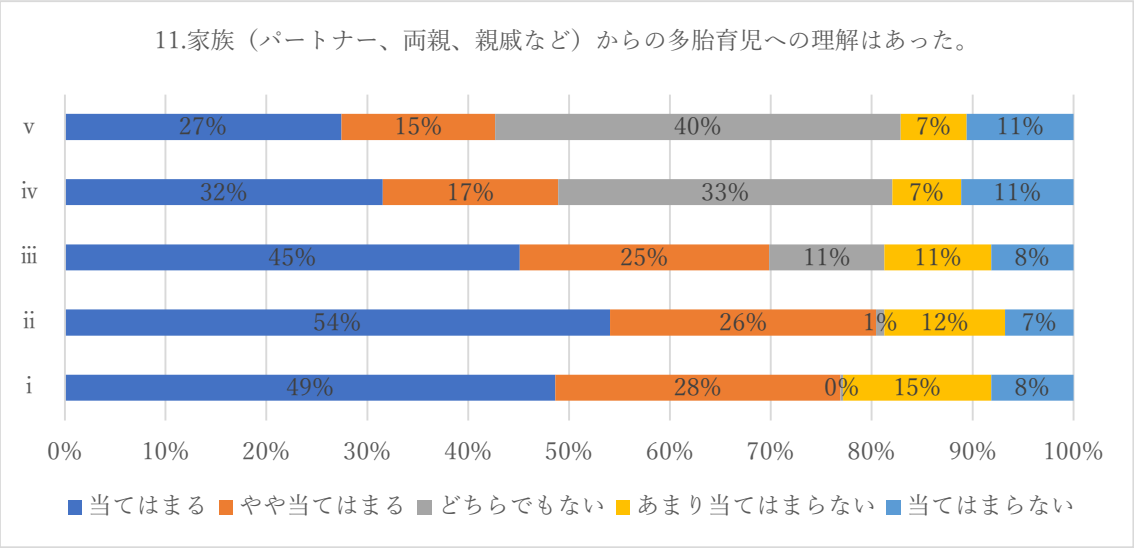


図 12 は、質問 12 の年齢区分ｉ～ｖにおける、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、ｉの区分において、半数以上の 60%が【あまり当てはまらない】【当てはまらない】を回答しており、【当てはまる】【やや当てはまる】を回答しているのは、40%になっているが、ⅱの区分では逆転して、【当てはまる】【やや当てはまる】の回答が 70%を占めている。【どちらでもない】を除いた場合、ⅲ、ⅳ、ｖにおいても、【当てはまる】【やや当てはまる】が 6 割を超えている。ⅳ、ｖについては、ⅲよりも【当てはまらない】の割合が増えている。

質問１２の解釈として、妊娠中と出産後では大きな変化が見られ、出産後約 2、3 ヶ月から赤ちゃんが動き出す期間において、母親が自分自身のことを責めしまうことが多いことがわかる。それ以降、子どもの成長に合わせてその割合は多少減っている。

この分析結果についての考察は、ⅱ、ⅲの区分において、質問 4 の結果からわかるように、母親が体力的な限界を感じている状態では、自分が思うように家事や子育てをすることができず、その結果、感情の矛先が母親自身に向けられていると考えられる。

図 12. 質問 12 の年齢区分ｉ～ｖにおける回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）

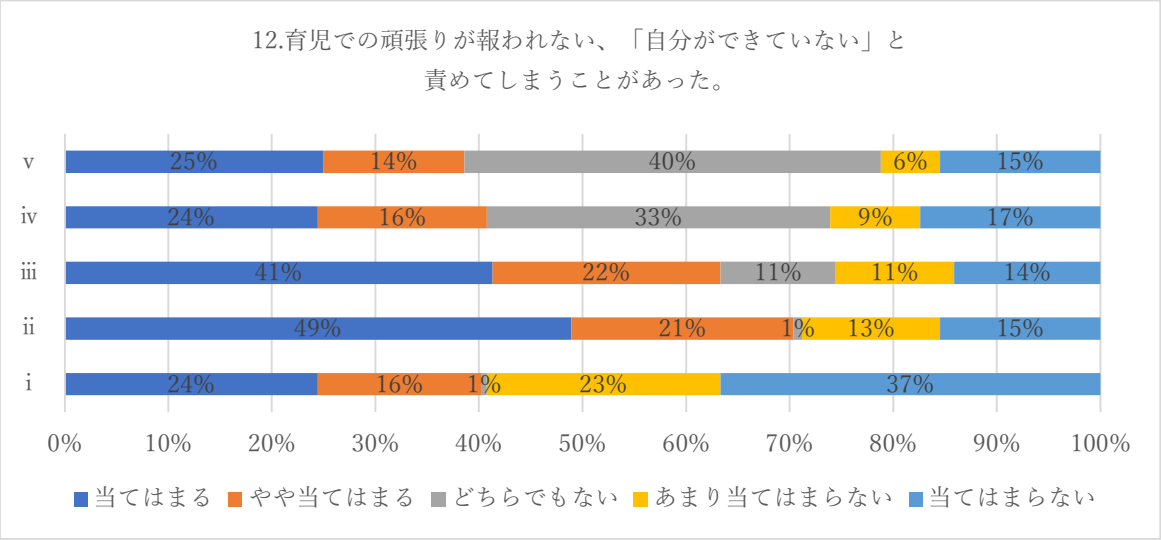
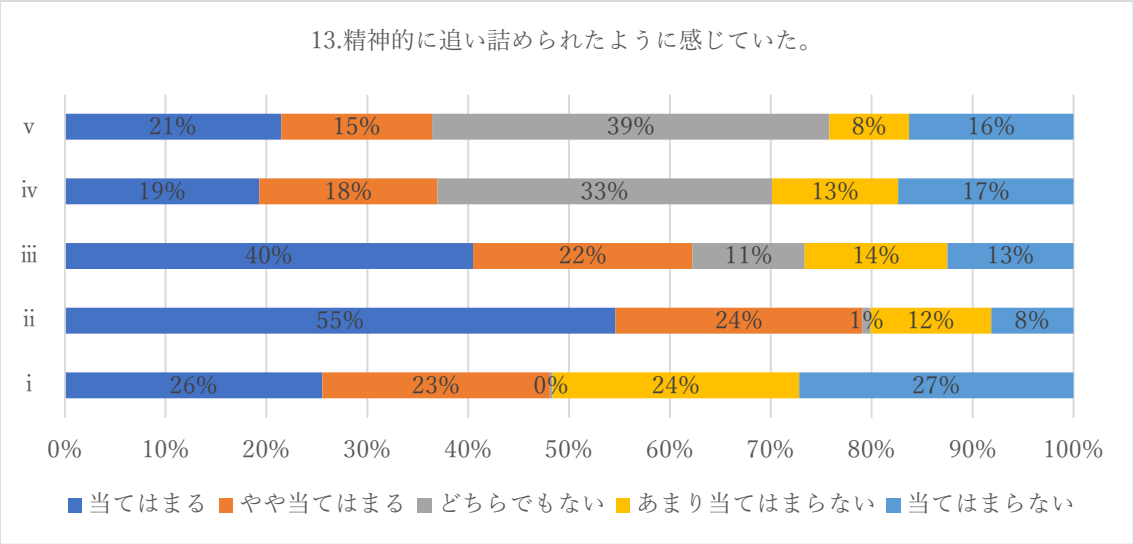


図 13 は、質問 13 の年齢区分ｉ～ｖにおける、回答の選択肢ごとの割合を%で示した図である。ここから読み取れることとして、全体的には質問７と似た傾向にある。ｉでは、【どちらでもない】を除いて、それぞれの選択肢にほぼ均等に回答が分かれている。ⅱでは、【当てはまる】【やや当てはまる】に 79%が回答している。ⅱからⅲの区分にかけては、【当てはまる】【やや当てはまる】が占める割合が 79%から 63%に減っているが、ⅳからｖの区分にかけては、【どちらでもない】を除いた場合、【当てはまる】【やや当てはまる】が占める割合は、ⅳでは 55%、ｖでは 60%と増えている。

質問１３の解釈として、妊娠中は回答にばらつきがあるが、出産後２、３ヶ月は多くの母親が精神的に追い詰められているように感じていることがわかる。この傾向は、子どもの成長に合わせて一度は下がるが、イヤイヤ期になると、精神的に追い詰められていると感じる割合が増えている。

この分析結果についての考察は、質問１２と同じく、母親が体力的な限界を感じていることは、精神的に追い詰められることに影響していると考えられる。また、ⅱ、ⅲ、ⅳにかけて減っていた精神的追い詰めが、イヤイヤ期に増えていることは、母親が思うような育児をできないことが精神的な負担になっているからだと考えられる。

表 13. 質問 13 の年齢区分 i ～ v における回答の選択肢ごとの割合（注：N=368）



第 5 節　終わりに

本論文では、多胎家庭の母親の孤立を測定する指標を作成し、指標を用いたアンケートを実施した。そしてアンケートから得られた回答の統計を取り、結果の分析を行うことで、多胎家庭の母親が孤立する実態を明らかにすることを試みた。

分析の結果からは、母親の語りなどの定性的なデータからは読み取ることができない、多胎家庭の孤立の実態を把握できたと考えている。一つの質問に対して、５つの年齢区分それぞれ回答における、選択肢の割合をグラフで示したことによって、特定の悩みを抱えている母親の割合を目に見える形で示すことができた。

年齢区分を設けたことによって、ある特定の悩みを抱えている母親の割合は、年齢区分に応じて変化していることがわかった。例えば、「母親が体力的な限界を感じている」という一つの悩みに対して、その悩みを抱えている母親の割合が、妊娠中と出産後では大き

く変化しており、また、子どもの成長段階に応じて変化していくことがグラフから読み取ることができた。

今後に関して、３つの改善点を挙げておく。一つはアンケート項目について。例えば質問 7、8、11 などには「家族」という言葉を使っていたが、その定義に曖昧さがあり、一部の回答者には混乱を招くことがあった。

２つ目は回答者の属性についてである。「双子に成長の差があり答えづらかった」という意見もあった。今回のアンケートでは、質問項目が多かったため、回答者の負担を減らすために、回答者の属性に関する項目は設けなかった。しかしより詳細な分析をするためや、回答者の答えやすさなどを考慮すると、ある程度の属性に関する質問は必要だと思われる。

３つ目は自由記述の回答の活用である。今回アンケートでは 368 件の回答を集めることができたが、そのうち 100 件以上自由記述での回答を得ることができた。その中には、アンケート項目には含まれていない他の点で、多胎家庭の母親の孤立につながっている要因のヒントや、「サービス自体はあるが、利用するまでには至らなかった」など、多胎家庭の支援に対する改善点も見つかった。今後は自由記述の回答の分析にも取り組みたいと思う。

参考文献・参考 URL

・阿部彩,『貧困から社会的排除へ：指標の開発と現状 』,海外社会保障研究,Winter No.141,2002, 国立社会保障・人口問題研究所,pp.67-80

・大木秀 彦 聖美,『日本における多胎育児支援の歴史的変遷と今日的課題』, 石川看護雑誌,Vol.14,2017,石川県立看護大学学術リポジトリ,pp1-12

・村上淳子 中新美保子 鈴井江三子,『双子の母親の育児ストレスに関する研究 ―乳児期の双子育児をする母親の体験から― 』, 川崎医療福祉学会誌,Vol. 22 No.1,2012,川崎医療福祉学会, pp.79-86

・横内光子,『心理測定尺度の基本的理解』,日集中治療医学会雑誌、14 巻 4 号,2007,一般社団法人日集中治療医学会,pp. 555-561

・宮本聡介・宇井美代子,『質問紙調査と心理測定尺度 計画から実施・解析まで』,2020, サイエンス社、第 4 章 pp.62

・厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業,『多胎育児家庭の虐待リスクと家庭訪問型支援の効果等に関する調査研究』,2018,一般財団法人日本多胎支援協会
http://jamba.or.jp/2016/wp/wp-content/uploads/2018/03/kodomokosodateH29.pdf
（2021 年 1 月 17 日参照）
・内閣官房社会的包摂推進室社会的排除リスク調査チーム,『社会的排除にいたるプロセス～若年ケース・スタディから見る排除の過程～』,2012,厚生労働省
https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002kvtw-att/2r9852000002kw5m.pdf
（2021 年 1 月 17 日参照）
・NPO 法人つなげる,『2019 年度年間事業報告書』,2020
https://tsunagerunpo.com/wp-content/uploads/2020/12/2019 年度-事業報告書.pdf
（2021 年 1 月 17 日参照）